



各務東山遺跡

編集 各務原市埋蔵文化財調査センター
発行 各務原市教育委員会
TEL (0583) 83-1123
平成14年3月20日



発掘調査区の航空写真



検出された遺構

各務東山遺跡の発掘調査は、平成4年度に実施し、約16,000㎡の面積を調べました。

尾根は南北に細長いので、地形は西と東の斜面で構成されています。発掘調査では、東斜面に5基の窯跡、西斜面に1基の窯跡を確認しました。窯の内部や周辺からは、約30,000点の須恵器等が出土しました。

東斜面の窯は、1・2・3・4・6号窯、西斜面の窯は、5号窯と名付けました。1号窯は灰釉陶器を、その他は須恵器を焼成した窯です。



発掘調査の様子(4号窯)

発掘調査のきっかけ

平成元年、各務原市土地開発公社は、各務東町に工業団地の造成を計画しました。工事を行う範囲には、北山から南へ伸びた丘陵状の尾根地形があり、造成のためには、この尾根の大部分を削り取らなければなりませんでした。

この丘陵の周りは、過去に幾度かにわたって、須恵器や灰釉陶器の破片が多く採集されていたところです。そのため、斜面地形を利用して築かれた、あな窯や登り窯が埋もれていると考えられていました。そこで、造成工事に入る前に、発掘調査を行って記録保存を実施することになったのです。

窯の特徴

いずれの窯も、斜面を空洞に掘り抜いて造られています。この辺りの山は、内部が砂質の岩盤でできていますので、比較的掘りやすく、丈夫な窯を造るのに適していたようです。

窯の基本的な構造としては、一番下に、松などの燃料を燃やす「ねんしょうしつ燃焼室」があり、その上に製品を並べて焼く「しょうせいしつ焼成室」、そして一番上に、「けむり煙出し孔」が設けられています。この孔の上部には、窯の中に雨水が入りこまないように溝が掘られています。また、窯本体の下方には、割れたり歪んだりした不良品を掻き出す「はいばら灰原」とよばれる空間があります。

1号窯：長さ3.78m、最大幅1.20mの大きさです。燃焼室と焼成室の間にはぶんえんちゆう分焰柱と呼ばれる仕切りが残っていました。また、焼き物を水平に置くためのしょうだい焼台も確認されました。

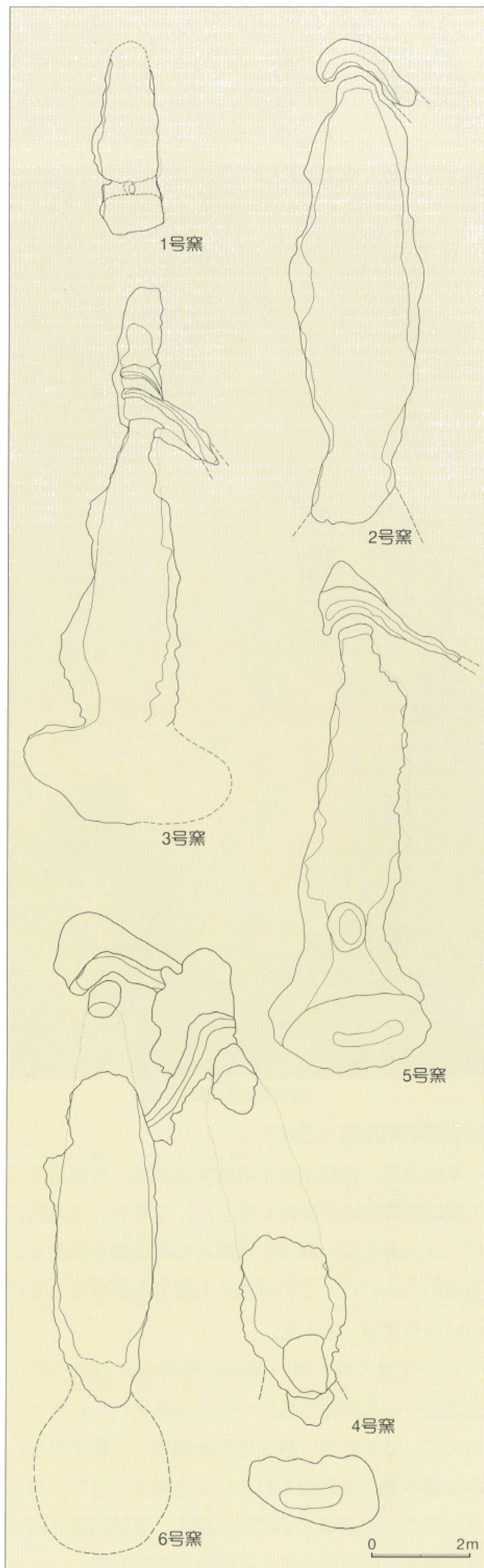
2号窯：残存した長さ8.88m、最大幅2.16mの大きさです。床には砂を敷き、壁の内側には粘土を貼った状態がよく残っていました。

3号窯：現存した長さ8.04m、最大幅1.62mの大きさです。燃焼室の側壁は、高熱を受けた粘土がコンクリートのようになくなっていました。

4号窯：現存した長さ9.78m、最大幅1.74mの大きさです。この窯で焼いている最中に、天井が崩れ落ちてしまったようで、半焼けの須恵器が下敷きになっていました。他の天井部分は崩れずに残っていました。

5号窯：現存した長さ8.76m、最大幅1.98mの大きさです。燃焼室が深さ93cmの、大きな穴のようになっているのが特徴です。また、この窯のみ、灰原が広く残っていました。

6号窯：現存した長さ8.40m、最大幅1.89mの大きさです。4号窯の南隣に接するように掘られていました。窯の内部は、掘り抜いたままの状態です。焼けた様子も一切ありません。4号窯より先に造られたことが判りましたので、完成間際に何らかの問題が起き、隣に6号窯を造り直して使用を始めたと思われます。



出土した遺物

各窯の内部や灰原より、多くの須恵器等が出土しました。その器種や型により、窯で焼かれていたものが何であるか、そして何時ごろのものかを知ることができます。

窯の内部に豊富な資料を残していた4号窯は、^{つきぶた}坏蓋や^{しじこ}四耳壺・^{たんけいこ}短頸壺などの特徴から、7世紀末から8世紀初めの窯であると考えられます。他に、特殊な形をした器種が認められます。それは、^{さばりもほうわん}佐波理模倣碗という、金属の器を真似て作った須恵器に、^{きやく}脚（台）が付けられたものです。

2・3号窯は、出土品が少ないので確かなことは言えませんが、ほぼ4号窯と同じ時期のものではないかと思われます。

1号窯は、灰釉陶器の碗や皿など、器の表面に^{ゆうやく}釉薬を掛けた製品を焼いた窯で、他の窯よりも新しく、11世紀ごろの窯だと考えられます。

5号窯は、灰原から出土した大量の須恵器を見ると、およそ8世紀後半の窯であると考えられます。なかでも注目されるのは、^{ゆうだいつき}有台坏・^{ばん}盤という器種の底面に、「^ふ府」という漢字がヘラで描かれているものです。この地域で焼かれた須恵器は、広く遠隔地にも出荷されていますが、この資料は、当時、どこかの^{こくみ}国府などに製品を納めていた証拠ではないかと考えられます。



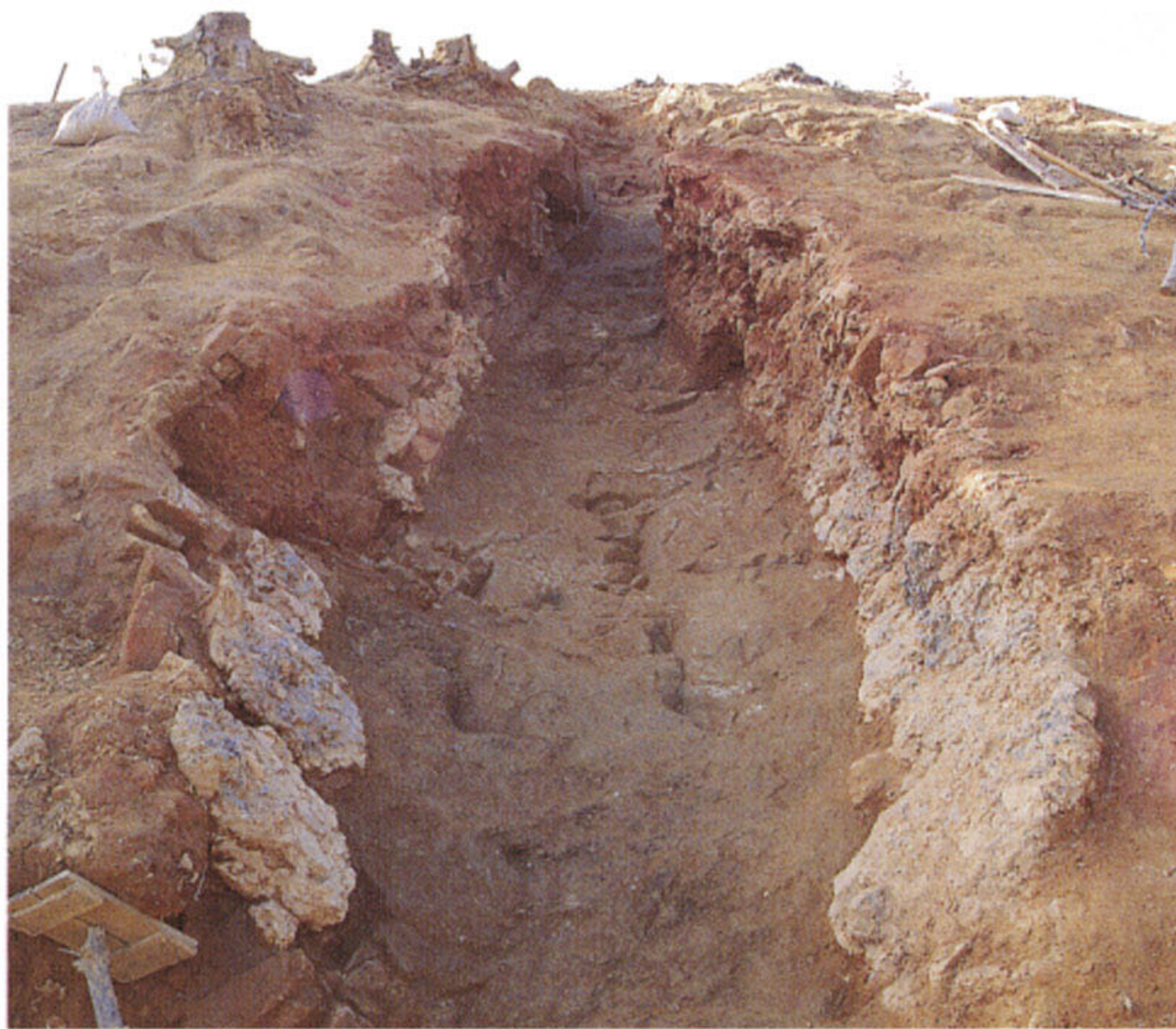
「府」文字のある須恵器



4号窯出土須恵器



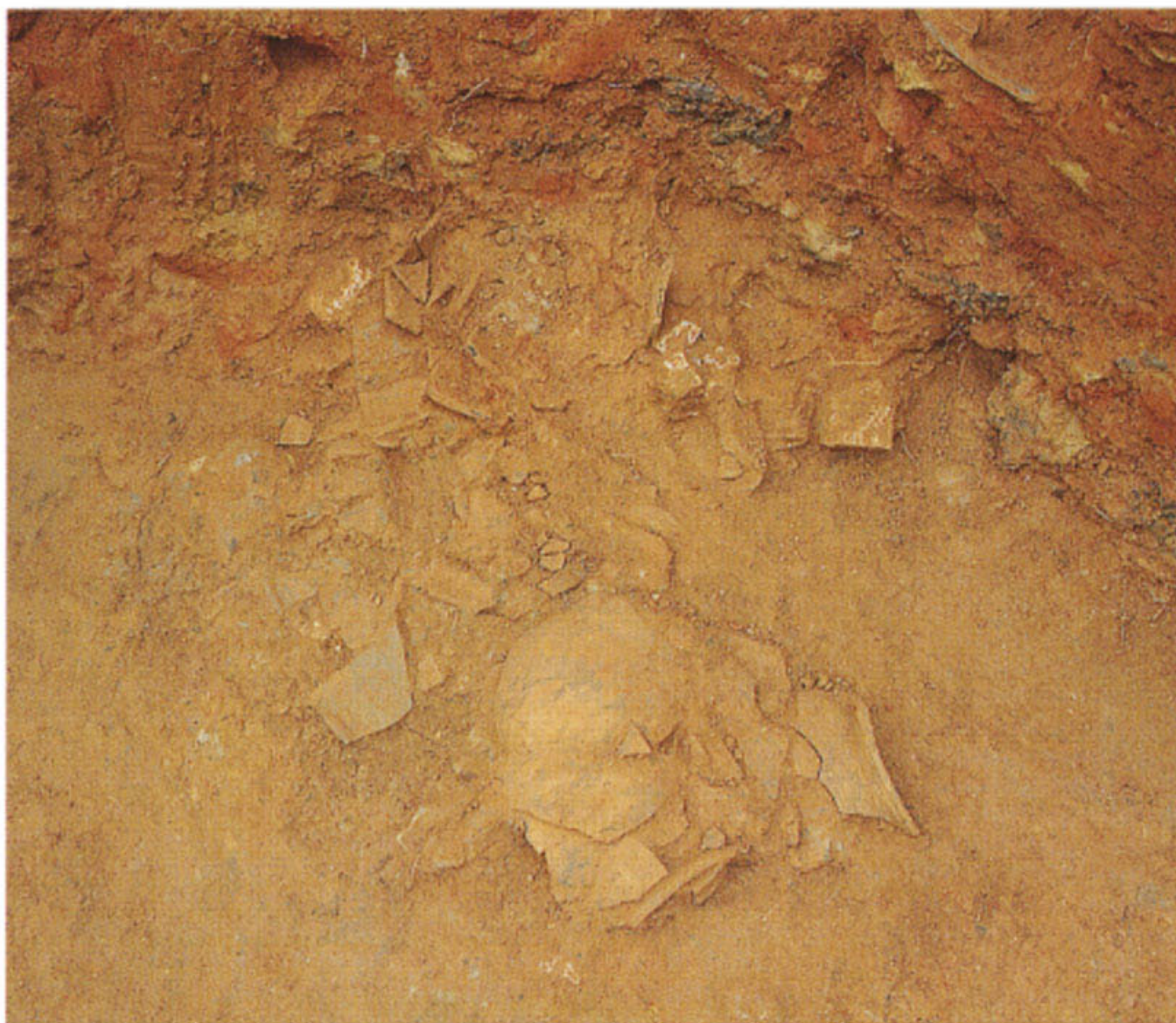
5号窯灰原出土須恵器



3号窯



4号窯(右)と6号窯(左)



4号窯の遺物出土状況



5号窯灰原の遺物出土状況

まとめ

各務原市北部から、岐阜市や関市にまたがる山地部には、須恵器などを焼いた窯跡が遺跡として多く残されています。この地域は、古代の一大窯業地帯として、「美濃須恵窯址群」と呼び研究されています。地域毎に詳しく見ると、鶯沼地区、各務地区、^{かかみ}須恵地区、須恵天狗谷地区、蘇原地区、岩滝地区、那加地区、芥見地区、日野地区、大洞地区、桐谷地区の11箇所に分けられます。

各務原市では、那加地区や蘇原地区において、古墳時代終末（7世紀末）ごろから、須恵器の大量生産を始めたことがわかっています。今回の各務東山遺跡の発掘調査では、各務地区においても、この頃から須恵器生産が始められ、奈良時代初め（8世紀初め）には、複数の窯が並んで営まれるような規模

にまで、拡大していたことがわかりました。

また、奈良時代の後半（8世紀後半）には、非常に多くの須恵器を焼成し、特殊な器種や「府」文字を記した須恵器を焼くなど、重要な役割を果たしていたことが想像できます。

各務東山遺跡で確認された窯の数は、6基ですが、どの窯の時期にも属さないような焼き物も多く出土しました。遺跡のあるこの尾根は、長い年月を経て崩れたり、削られたりしています。実際に営まれた窯は、もっと多くの数であったと想像されます。

その他、4号窯からはフイゴの羽口（金属の精錬に用いる送風用の筒）が出土していますので、製鉄に関わった施設も、どこかにあった可能性があります。また、中世の五輪塔も発見されています。この丘陵には、各務地区の長い歴史が刻まれていたのです。